

### Ⅲ - 2 脳損傷例のクリック音融合閾と、 聴覚的言語理解の関係について

○遠藤 邦彦<sup>1)</sup>      阿部 晶子<sup>1)</sup>  
杉下 守弘<sup>2)</sup>      市川 英彦<sup>3)</sup>

クリック音融合閾（CFT）は音の分離能力の指標の一つとされている（Albert & Bear, 1975）。我々はCFTと失語症患者の聴覚的言語理解の関係を検討した。

【実験1】二つのクリック音の間隔を変え、何 msec. 離れたら2つに分離して聞こえるか測定した。音は両耳に同時に呈示した。対象は失語症15例、コントロール群は右半球損傷（RHL）8例、健常者6名であった。CFTの平均値は、失語症例が13.9msec., RHLが10.7msec., 健常者が2.3 msec. であった。失語症例は健常者より有意に低下していたが、RHLとは有意差がなかった。失語症例では聴覚的言語理解の重症度（ARS）とCFTには相関がなかった（ $r = 0.111$ ）。CFTが20 msec. 以下と著しく低下していた2例のうち、1例は左の聴放線（純粋語聾）、1例は右の聴放線（聴覚的言語理解の障害なし）が損傷されていた。CFTは正常だが語音認知障害型の感覚失語が認められた1例は、Wernicke 領野に損傷があり、聴放線は保たれていた。

【実験2】CFTの右耳と左耳の差を検討した。

対象は失語症例のうち、聴放線に損傷のない5例と損傷のある1例、および右半球損傷例のうち、聴放線に損傷のない1例と損傷のある1例であった。CFTは脳損傷側の対側の耳で低下していた。聴放線に損傷のない例は、両耳呈示の成績は良い方の耳と同程度であった。一方、聴放線に損傷のある例は、両耳呈示の成績は悪い方の耳と同程度で、両側性に音の分離能力が低下したのと同じ状態であった。

【まとめ】聴放線の損傷でCFTの低下を生じる。しかしWernicke 領野が健全な場合、音の分離能力がCFT 20msec. 程度に低下しても聴覚的言語理解の障害を生じないと考えられた。左半球の聴放線に病変があると隣接するWernicke 領野の機能が低下する。このため言語音の記憶機構が完全には機能せず、これに音の分離能力の低下が加わると聴覚的言語理解の障害を生じると考えられた（例：純粋語聾）。Wernicke 領野の言語音の記憶機構自体が損傷されると（語音認知障害優勢型の感覚失語）、CFTが正常でも聴覚的言語理解の障害を生じると考えられた。

1) 東京都神経科学総合研究所

2) 東京大学医学部音声言語医学研究施設

3) 鹿教湯総合リハビリテーション研究所附属病院